

b13th &

2

ホールのトーンスケール

Vol 2 : Getting out side series

hitoshikawai.com

For
guitarists



はじめに

このようなテキストだけのレッスンに意味があるのか？そう思われるかもしれません。

確かに動画は便利です。一目瞭然なのですから。

このレッスンを手にしたあなたはある程度ギターが弾ける自負のある方です。

すでに多くの知識と経験がありながら、この本を手にとられたのであれば...

限られた情報から自分の頭で考えるという行為を求めているのかもしれません。

動画と比較したらテキストから得られる情報は非常に少ないですが、瞬時に読み返す事ができます。

動画は便利過ぎるので、よくあるのが動画を見て何となく分かったような気になってしまう事。

目で見て理解できてしまうので、脳があれこれと想像する余地がありません。

自分の知識をつなげて、まとまり感を得る作業をスキップしてしまいます。

難解に見えるコードやスケールも全て基礎を崩しただけのものです。

実はあなたの中にそれらの部分的な理解はすでにあるのです。

テキストだけだと自分の経験と知識、記憶をたぐって理解しようとします。

他の情報がありませんからね。でもその作業が貴重なのです。

腑に落ちる経験をしたら二度と忘れる事はないでしょう。

b13コードをよく眺めてみる

b13コードをよく眺めてみる

大切なのは自分で発見して腑に落ちる経験です。

何年も前に学んだ事でも、今になり腑に落ちる経験はよくあります。

単にインプットを増やすのではなく、ギターを手にしてあれこれ考える時間が必要です。

b13を含むコードというと即オーギュメントド=ホールトーンスケールという説明をするのが多いかもしれませんが。

でも他のコードトーンとの兼ね合いで違うスケールが導き出されます。

これは教わる事でもなく、自分で指板を眺める事で得られるものです。

指板上でコードシェイプを動かしながら脳の中で想像を働かせましょう。

これも練習です。

自分の中にある知識と経験の点と点をつなぎ合わせていく行為が大切です。

そのつながり、まとまり感が、マスターした実感を与えてくれます。

なんとなく理解していた事に、まとまり感、納得感を増し加わせるにはよく考える時間が必要です。

b 1 3 が関係するコードとスケール

b 1 3 が関係するコードとスケール

b 1 3 のコードを観察しましょう。

b 1 3 と他のエクステンションとの組み合わせと、そこから得られるスケールは以下の通りです。

- b 1 3、b 9 = ハーモニックマイナー
- b 1 3、9 = メロディックマイナー
- b 1 3、# 1 1、9 = ホールトーン
- b 1 3、# 1 1、b 9、# 9 = オルタード

b 9、# 9、# 1 1、と 1 3 のミックスがディミニッシュドスケールになります。

オルタードエクステンションばかり扱ったコードがオルタードコードとなり、オルタードスケールを導き出します。

オルタードコードは言い換えれば、ディミニッシュドとオーギュメンテッドを足したものです。

そのように捉えると、オルタードスケールをそのまま暗記するのが非常に馬鹿げているのが分かります。

何を隠そう、それをやったのが僕でした。

当時何も分かっていませんでした。

しかし、後になってディミニッシュドとオーギュメンテッドを学んで目から鱗が落ちました。

ですから最初にディミニッシュドとオーギュメンテッドを学ぶと分かり易いだけでなく、使い方にも幅ができますよ。

マイナーコードに解決する場合

マイナーコードに解決する場合

例えば、C mに解決する前にG 7 b 1 3が鳴っている場合、そのサウンドは非常にナチュラルです。

1 1を併用する事はなく、5 t hを使います。（この説明は下の方でもします）

b 1 3の音はE bです。E bはC mコードの3 r dと共通音です。

マイナーコードに解決するドミナントコードの場合、b 1 3をつけるのは自然です。

メタル系は、このサウンドを聴いたらピンと来てほしいところ...

このコードこそがハーモニックマイナーだからです。

b 9 = A bも加えると（# 9はつけません）、その響きがハーモニックマイナースケールです。

マイナースケールそのまま、7番目の音だけがナチュラルに変わります。

そしてCの音だけが含まれていません。ここがカギなのです。

ハーモニックマイナーを雑誌か動画で覚えても、この理解がないと全く意味がありません。

なぜならCハーモニックマイナーと覚えてしまうと、Cを中心に考えるからです。

パーフェクト5 t hビロウを付け加えて、ややこしくしている雑誌もあります。

確かに理論的に言えばそうですが、Cセンターから脱するのは難しいです。

英語が分からない人にビロウ=below=下、なんて覚えられません。

海外でもこんな面倒な言い方しません。

ハーモニックマイナーを弾いても、Cを基点としたフレーズを弾いては美しさが全く出せません。

たとえバックグラウンドがC m一発であったとしても、G 7とみなしてGのコードトーンをフレーズの骨組みとして弾く時にテンションが感じられて美しくなるのです。

ドミナントフレーズとしてハーモニックマイナーを意識すると見える世界が全く変わりますよ。

実はこれが基本の基本であり、他にも通じているからです。

ナチュラル9を加えるとメロディックマイナーとなります。

例えばCのキーでA7からDmに解決する時などジャストフィットします。

マイナーキーや解決する次のコードがマイナーの場合はb 1 3という音はオルタードエクステンションというもの、マイナースケール上の音で普通の選択となります。

b13=#5の扱いの注意点

b13=#5の扱いの注意点

ドミナントコードのエクステンションの場合、メジャー3rdがあるためアヴォイドノートの関係で#11が付随してきます。

#11と5thとは半音の関係です。

そこにb13を載せるとどうなるか？半音が2つ繋がってしまいますね。

何が何だか分からなくなってしまいます。

ですから#11thと5thを使う場合はナチュラル13を使います。

#11thとb13を使うならば5thを抜いてしまうのです。

5thをコードから抜くと考えるよりb13を#5thと思えば、オーギュメントコードとなるわけです。

メジャーコードの5thがシャープされた形は広い骨格を持つ響きです。全部メジャー3rdのインターバルになります。

その反対がディミニッシュドです。マイナーコードの5thがフラットしています。そして全てがマイナー3rdのインターバルになっています。

僕はコードを家とイメージしています。

ルートを土台、3rdをカラー、5thを建物と考えます。

オーギュメントは一般的な家の形ではなく高い建物のように感じています。

しかも明るいカラーです。

ディミニッシュドはダークでしかも平屋のような感覚で見えています。

何かにたとえたイメージを持つ事をお勧めします。

G9b13 = 2つのオーギュメンテッド = ホールトーン

G9b13 = 2つのオーギュメンテッド = ホールトーン

G9 (b13 #11) は、そのままホールトーンスケールです。

バラズとGとA = 2つのオーギュメンテッドトライアドのコンビネーション。

コンディミ = 2つのディミニッシュドのコンビネーションです。

ホールトーンスケールは全音だけのスケールで6音になります。

1. ナチュラル9th、つまりスケールの2番目の音
2. メジャー3rd
3. シャープ11#、スケールの4番目の音がシャープされている
4. オーギュメンテッド5th、コードの5thがシャープされている = b13。
5. フラット7th、つまりドミナント7

以上の6音。

半音のインターバルがなく、全てが全音でつながっています。

オーギュメンテッド5thとフラット7のインターバルは混乱しやすいかもしれません。

表記をb13、b6と書くとフラット7から全音だと分かりやすいでしょう。

オーギュメンテッド5thと同音です。

5thから7thと考えると、全音のインターバルとは感じにくいのが厄介です。

ワープゾーン

ワープゾーン

なぜオーギュメントコードが厄介なのか...

b9を含むドミナントコードがディミニッシュドとなるように、オーギュメントコードもワープゾーンなのです。

ホールトーンスケールは全て全音音階でできている6音スケールです。

2つのオーギュメント=6音

ディミニッシュドスケールは8音です。

2つのディミニッシュド=8音です。

ディミニッシュドの解説本で8個のメジャーとマイナーコードに解決できると書きました。

ホールトーンスケールは6音、そして6個のメジャーとマイナーコードに解決できるのです。

基本的なルールを知っていたら、コードの表記に関わらず好きにエクステンションを加えていいのです。

具体的にコードを指定されていなくても、特にドミナントコードなどは崩してもいいのです。

その分、メンバーはよく聴いて反応しなければいけません...

ですからジャズミュージシャンの間では、コードの表記は基本の4種類しか書きません。

- メジャー Δ
- マイナー -
- ドミナント 7
- ハーフディミニッシュ

具体的な指定がある時はよほどの事で、どうしてもそれが欲しいという時だけです。

普通はミュージシャンに自由裁量が与えられているのです。

3つのトライトーン=6つのキーへ転調可能

3つのトライトーン=6つのキーへ転調可能

オーギュメントコードやディミニッシュドコードはそれぞれシンメトリー、対称的なインターバルでできていて...

どの角度から見ても同じ形に見えます。つまり正三角形や正方形と同じです。

どこを切っても同じヴォイスングのコードとなってしまいます。

コードにある6音の全てがコードのルートとして考える事ができます。

シンメトリーとは対称的であるので、どこから見ても同じ眺めになってしまうのです。

トライトーンの解決という観点でいうと...

- GとC#=Ab、AbmもしくはD、Dm
- AとD#=Bb、BbmもしくはE、Em
- BとF=C、CmもしくはF#、F#m

以上6つのキーのメジャーとマイナーへの解決となります。

ディミニッシュドコードの場合、4音が全てマイナー3rdのインターバルです。

その4音が全てルートとして考える事ができます。

ディミニッシュドスケールとG13b9の説明の時に8つのキーに解決できると書きました。

それは二つのディミニッシュドコードが存在するからです。

トライトーンが4つ存在する事になります。

G13b9のようなドミナントコードが4つ対称的にディミニッシュドコードトーン上にできます。

2つのディミニッシュド、GとAbディミニッシュドコードがあると考えると、8つのキーに解決できると考えられます。

1つのフォームで6つのドミナントコード

1つのフォームで6つのドミナントコード

G 9 b 1 3 を弾いて2フレット上下に平行移動してみると、実にどれも同じコードである事が分かります。

どれもが同じコードです。AはGの9 t h、Bは3 r dであります。

コードの1つのヴォイスングで6つの違う名称のコードになります。

つまり6つのコード、キーにも解決できます。

もちろんメジャー、マイナーのどちらにもです。

という事は、転調に対応できるだけでなく同じフィンガリングのフレーズで違うキーを想定したフレーズが弾けるのです。

例えば、G7の時にAのオーギュメントドトライアドを弾いたり、そのコードトーンを骨組みとしたホールトーンのフレーズです。

G、B、D#を基調としたフレーズでなく、A、C#、E#(F)を基調としたフレーズを弾くとDのキーを暗示する事になります。

単純にアウト感が強くなるという事です。

ディミニッシュドにしても同じ考え方ができます。

同じフィンガリングで違うポジション（マイナー3rd上下）で弾けば機能します。

インターバル

最後に、インターバルを利用するのもお勧めです。

全音、メジャー3rd、トライトーン、#5th、b7のインターバルからなるフレーズを作るといいでしょう。

ホールトーンはディミニッシュドと違い、半音がありません。

ですからインターバルを弾く時には間違える可能性がかなり低いです。

スケール上のどの音を選んで、どのインターバルを弾いても同じように響きます。

少ない音で強烈なテンションを醸し出せるでしょう。

リズムックにモチーフ的に使うのが簡単です。

トリッキーな演出をするのに適しています。

まとめ

まとめ

- b 1 3 はマイナーコードに解決する場合、# 1 1 を含めないで5 t hと併用すると自然な響きとなる。また、b 9 を加える事でハーモニックマイナー、ナチュラル9 を加える事でメロディックマイナーそのものの響きを得られる。
- # 1 1 とP 5 を選択するならば、b 1 3 を使用できず、ナチュラル1 3とする。ダブルクロマティックにはしない。
- 同じく、# 1 1 とb 1 3 を選択する場合、P 5 は消去される。つまりb 1 3 = # 5 なので、便宜上オーギュメントコードと書かれる事が多い。仮にそう書いていなくてもb 1 3 とあれば、そう捉える。
- オーギュメントコード場合、ナチュラル9 を加える事でホールトーンスケールとなる。
- ホールトーンスケールは6音からなる。そして6個のメジャー、マイナーコードに解決できる。
- 同じフィンガリングのフレーズを全音ずらして弾くと、テンションが強まる。
- 2nd、メジャー3rd、トライトーン、# 5、b 7のインターバルを利用したフレーズ

聞いた話ですが、ギターという楽器は打ち込みで真空管の歪が上手く出せないらしいですね。

僕は少しだけアンプで歪む音というのが好きです。

タッチで音色をコントロールできるからです。

コンピューターに対抗するためには、大切な事だと思います。

近い将来、人間より賢いロボットが市場に出てくるわけで、人間の市場価値を考えざるを得ない時代になるかもしれません。

D J全盛の時代です。

8 0年代にドラムマシンが出てきたころ、いずれマシンが人間にとってかわると言われていました。

今も人間しかできない働きもありますが、ドラマーにとってはかなりの打撃です。

ギターはアコギも含めソロで演奏できますし、まだ対抗できる楽器です。

人間味を育てる事も大切だと思います。

そういう意味で、ルーツミュージックが流行るのもうなずけます。

ノラジョーンズとかルースなフィーリングのサウンドが評価されて然るべきなんですね。

オーギュメントッドコードとホールトーンスケール

著者 : hitoshi kawai

著者プロフィール : <http://www.hitoshikawai.com/about.html>